

# ART KISS LEITER

FOR KUMAMOTO ART PEOPLE Contemporary Art Museum, Kumamoto

熊本市現代美術館発行 <http://www.camk.or.jp> [季刊 2006.夏号] **vol.28**

## 反近代の逆襲Ⅱ 生人形と江戸の欲望展



CAMKレクチャーカレッジ  
「反近代の逆襲Ⅱ-生人形と江戸の欲望」2006.6.25

当館館長の南郷宏が、「反近代の逆襲Ⅱ-生人形と江戸の欲望」にこめた想いを語りました。

平成16年の第一回目に続く今回の展示会は、松本喜三郎と並び称される、もう一人の天才生人形師安本亀八が明治23年に制作した、その最大級の作品といっよい「相撲生人形」に因み、生人形だけでなく、幕末の浅草奥山をはじめとする「悪所」という、貴賤を超越した、人間解放の場を彩った、歌舞伎、相撲、そして浮世絵を曼荼羅のように展示し、「江戸の欲望」を視覚化しようとするものです。さらには継続して調査してきた、海外に渡ったスティベルト博物館の等身大の「武士像」、あるいはその対極のライデン国立民族学博物館の、江戸時代の庶民の生活を伝える「小人形像」や、出島のオランダ商館長などが持ち帰った「ミニチュア動物人形」など、生人形の多彩な広がりを紹介しました。

《武士像》スティベルト博物館蔵



## 生人形展記念講演会①「ステイベルト博物館と日本コレクション」 2006.6.24

今回の展覧会で等身大の武士像、小武士像2点を出品しているステイベルト博物館(フィレンツェ、イタリア)の学芸員のフランチェスコ・チヴィータ氏が日本コレクションの概要をお話くださいました。

ステイベルト博物館等身大の武士像は、着用されている甲冑は17世紀のもので、生人形はマネキンとして1872年に購入されたこと、しかし内部も精巧につくられるなど、高い技術をもった生人形師の手によるものであるとの解説がありました。また自らも芸術的活動を行っていたステイベルトが集めた、変わり罎など、芸術性の高い収集品の数々を写真で紹介してくださいました。(Y.H)



## GW人形劇 「ぶんぶくちやがま」 2006.5.6

GW人形劇と題して、人形芝居かすべるの新作「ぶんぶくちやがま」がアートロフトで開催されました。当日は100名を越す親子連れで大賑わい。こだめきのコミカルな動きに笑いが巻き起こり、登場人物の一挙手一投足から目が離せない子どもたちの横顔が印象的でした。演者が舞台上に現れて人形を操作するのは初めての試みとのことでしたが、不思議と気にならず、次々と新たな挑戦を続ける人形芝居かすべるの次回作が待ち遠しいひとときとなりました。(E.Z)



## Terwilliger-Cooperstock Duo バイオリン&ピアノによるアメリカン・クラシック・コンサート 2006.5.13

福岡アメリカン・センター共催イベント、バイオリンとピアノによるアメリカン・クラシック・コンサートが開催されました。演奏者はアンドリュー・クーバーストックさん(ピアノ)とウィリアム・ターウィリガーさん(バイオリン)。

モーツァルト、武満徹、ポール・シェーンフィールド、アーロン・コーブランドの曲が演奏されました。モーツァルト「ソナタイ長調K.305」では雅で軽やかな雰囲気、シェーンフィールド「パルティータ」ではユダヤ的な哀愁、武満「11月の霧と菊の彼方から」では絶妙な間を演出、コーブランド「バイオリンとピアノのためのソナタ」ではフロンティア・スピリットを感じさせる壮大な雰囲気、シェーンフィールド「四つのお土産」では、都会的なブギウギのリズムを楽しませてくれました。クーバーストックさんとターウィリガーさんの素晴らしいコンビネーションによってつむぎ出される素敵な時間となりました。(H.T)





# SUITTO KUMAMOTO

【スイット・クマモト】



本年度のスイット・クマモトは、熊本の華人インタビューです。(インタビュアー・構成: 藤原江美)

\*いける=花を生かす、ことと考へ、ここでは「生ける」と表記します。

## 【小原流編】

お話をお伺いしたのは、県内・外問わず精力的に飛び回って活動されている益田英二先生。今回もようやくお時間を割いてもらってのインタビューとなった。15歳の頃から花に親しんでいらっしゃる先生とお話の中で印象深かったのは、いけばなは四季折々に咲く花を愛でることから始まり今に続いていると思うが、最近では通年花材があふれ、その通年花材を使って季節感を表現しなくてはならなくなってきているという点。一年中ひまわりを見ることができると、ひまわりが夏に咲く花だということ知らない子どもたちが増えてきてもおかしくないのではないかと疑問が生まれ、季節感を大切に生ける花を子どもたちに伝えることはとても重要な気がしてきた。また、「いけばな」とはなんだと思いますかとお聞きしたところ、「生ける花ではなく活かす花」と言われ、「自然のままでは決して美しいとはいえない花々をテクニックを駆使して理想的な美しさに近づけることではないですかね」と厳しい目をして言われながらも、「ただそれが技巧的に見えてもいけないですから難しいですよ」と笑いながらおっしゃる先生に単にテクニックだけを重要視していない華人としての態度を垣間見ることができたような気がした。今一番興味のある花材は技術を施すことでいろいろな表情を見せてくれるひまわりとのことだったが、優しさの中にも凛としたところがある椿が先生への第一印象だった。



熊本の華人展 vol. 2 生け込み風景

## 【花芸安達流編】

お話をお伺いしたのは、笑顔が素敵な内山恵美瞳先生。今年に入って花芸安達流家元の安達瞳子先生が他界され大変なショックを受けられていたにも関わらず快くインタビューを受けてくださった。華道ではなく花芸という由来は、「花」は日本の伝統芸能としての華道から、芸は西洋の芸術に学ぶという意味からきているとのこと。「いけばなの出会いで、ものの見方や接し方が大きく変わり人間として成長できたのではないかと思います」と語られる先生の言葉から、安達瞳子先生との出会いがいかに大きなものであったかがひしひしと伝わってきて、花を生けるということは単なる技術の習得ではなく、人との関わり方、自分自身の生き方も学ぶことなのではないかと感じた。ひとりの人との出会いがここまで大きく人を変化させるその素晴らしさと、そのことを次の世代の人たちに伝えていかなければならないと思っらっしゃる先生を見てると、そんな出会いをされた先生がとてもうらやましく思うと同時に、日々の出会いを大切にしなければならぬと強く思った。先生がついつい生けてしまうお好きな花をお聞きしたところ菖蒲や水仙とのことだったが、夏の日差しにも負けずに咲く立葵が、私が先生に持った印象である。



熊本の華人展生け込み風景

## ファミリー・ツアー ①2006.4.30 ②2006.5.20

「ファミリー・ツアー」は、0歳から6歳までのお子さんとその保護者を対象としたツアーです。「アン・ハミルトン展」の真っ暗な部屋や音に、ちょっぴり怖くなったお友達もいましたが、会場に寝転がり映像を追いかけたりと、皆で会場の中を探検しました。鳥の鳴きまねをする場面では、あちこちから「こけこっこー」「かーかー」と小さな鳥さんたちの声が聞こえてきて、とってもかわいく、楽しいツアーになりました。

お家に帰ってからも、たくさんの鳥や虫たちの声に耳を澄ませて欲しいものです。(A.S)

※次回のファミリー・ツアーは、9月10日(日)、10月1日(日)いずれも10:30-を予定しています。お問い合わせ、お申し込みは現代美術館096-278-7500まで。



## プレママツアー 2006.5.30

日本初(かもしれない)「プレママツアー」の第2回目が行われました。このツアーは、出産前の比較的時間に余裕のある、妊婦さんとその家族を対象に、美術館や美術との出会いを楽しんでいただくための試みです。

今回は、簡単な自己紹介とプレママにおすすめの絵本や美術館のイベントの紹介、街中の穴場である当館授乳室(きれいー!)と大好評)やキッズサロンのツアーの後、アン・ハミルトン展と一緒に体験しました。

盛りだくさんの内容でしたが、皆さん笑顔で楽しんでいただけたようでした。

お母さんが楽しい気持ちが、おなかの赤ちゃんにも届いてくれたのではないのでしょうか?(A.S)

※次回のプレママツアーは10月11日(水)10:30-を予定しています。お問い合わせ、お申し込みは現代美術館096-278-7500まで。



## 現代美術館・東部児童館共催ワークショップ 「忍者遊び〜ワクワク修行〜」 2006.6.5

東部児童館と現代美術館の共催ワークショップ、本年度第1回目は大人気の「忍者遊び」!こども遊便局の皆さんを講師に迎え、美術館の中で様々な「修行」を行いました。

ほかにも館内にいる様々な人の「手配書」を作成したり、様々な修行を次々とクリアし、見事一人前の忍者として免許皆伝されたのでした。(写真は、身を隠しながら指令を遂行する忍者達の様子です。)(A.S)

※次回の共催ワークショップは、9月2日(土)14:00-同じくこども遊便局による「表現遊び〜生人形劇〜」です。お問い合わせ、お申し込みは現代美術館096-278-7500まで。



## モクモク工房 4.13/5.11「サラダボウル」 5.11/6.8「湯のみ」

毎月第2木曜に開催するモクモク工房。4-5月は「サラダボウル」をつくりました。サラダのグリーンが映えるよう、さわやかな白の釉薬を選ばれた方が多く、素敵な風合いのお皿ができあがりました!食欲ももりもり湧いてきそうですね。5-6月は定番の「湯のみ」。高台(こうだい:底の台のこと)をつけるのに少々苦勞しましたが、どっしりとした立派な湯のみができあがりました。これでおいしい新茶も楽しめそうですね。(A.S)

※モクモク工房では参加者の追加募集をしています。毎月第2木曜の14:00-17:00。参加費は1回1500円。今後の制作予定は、「豆皿セット」「大皿」「花器」「自由制作」です。お問い合わせ、お申し込みは現代美術館096-278-7500まで。





熊本在住の書家森山淡草(もりやま・たんそう)さんの展覧会。新作を中心に、多様な書の表現にふれることのできる展示になっています。作品の釈文・解説が掲載される配布資料も、森山先生手作りのもので、読むと作品の面白さが際立ちますので、おすすめです。今回の展覧会で、ぜひとも開催しかなかったのが書に関するワークショップでした。

熊大で書道鑑賞法を研究されていたことをきっかけとして、講演会「書道鑑賞クラスルーム」を開催しました。「書的感性を広げましょう」というテーマのもとに、古典から現代書までの流れを紹介、そして書家たちがミロやクレールなどに与えた影響などは、大変興

味深いお話でした。

また、本紙の書展取材にご協力いただいていることをきっかけとして、「書展の取材に行こう」を開催しました。当日は約40名の参加者とともに、「第28回熊本県書道展」(県立美術館分館)を取材。展示作品を眼前にしなが、それぞれの書の特徴、見所をお話いただきました。また、会場での出品作《鑑》にこめた創意なども特別にご紹介いただきました。参加された方も、とても熱心に観賞されていて、「こういう機会がもっとあれば、書に触れ合う楽しみも増しますね」と大好評でした。(H.T)



当館館長南嘉宏が、フェミニズムとアン・ハミルトンの関係について講演しました。

熊本市現代美術館は特設フェミニズムを強調するつもりはないのですが、開館記念展「熊本国際美術展ATTITUDE2002」では、サーニャ・イヴェコヴィッチ、エネリス・ゼンバー、リュドミラ・ゴルロヴァ、スーザン・ヴィクトール、嶋田美子、ブブ・ドラ・マドレーヌを、以後、「九州力」では田部光子、さらには「マリーナ・アブラモヴィッチ」展、「草間彌生」展、そして、今回の「アン・ハミルトン」展というように、世界的に活躍する女性アーティストを数多く紹介してまいりました。

アン・ハミルトンは自らをフェミニズム・アーティストと呼ぶことはありません。しかし、彼女の、その初期から基本的に変わることのない、不可視の記憶の再生装置としてのインスタレーションを、人間回復の自己防衛本能の現われとして考えるとき、ハミルトンの自己防衛という「女性性」原理の存在に、フェミニズムの文脈においてその芸術性を語る可能性が浮上してくるのです。



アーティストがみずからの作品(当館収蔵作品)にコメントをよせる新コーナー「レター・フロム・アーティスト」。あわせてアーティストの最新情報をお届けします。

# Letters from Artists

◎第1回/リュドミラ・ゴルロヴァ Lyudmila Gorlovaさん(fromロシア)  
1968年モスクワ生まれ。モスクワのアート・カレッジで学んだ後、写真や映像を中心に作品を発表、日常をユーモラスに切り取り、人間の振る舞いを主題とする。

## Q.1《Happy End (Moscow)》、《Happy End (Kumamoto)》についてお話をきかせてください。

《Happy End (Moscow)》について  
《Happy End (Moscow)》は画期的な変化の瞬間を作品にしました。あの時期の人々の考えを作品にとどめることが出来たのです。「グラスノチ(情報公開)」における最重要項目としての、マスメディアの興隆への期待の高まりがありました。人々は待ちのそんでいた幸福を、夢見ていました。もし、以前は人々が集団的な理想のもとで繋がっていたとすると、いまや人々は個というフィールドのもとに繋がりはじめています。古い社会のシナリオは終了し、新しいシナリオはまだどこにもないのです。

今まで、モスクワでは、結婚式を終えたばかりのカップルは、クレムリンの壁のふもとの「無名戦士の墓」の「永遠の火」のそばにブーケをたむけるという慣習がありました。さて、モスクワの中心は、大きなマネージ広場に代わりました。マネージ広場は、幾多の革命の場であり、政治的集会が行われた伝統的な場です。新しい時代になって、その場所は、ティズニールランド風のお土産市場というもうひとつの機能を持つようになりました。過去を捨て、新しいシナリオを持たずにいる今、人々は本能的に新しい象徴的なコード(規範)を探し求めています。

状況が変化した結果、モスクワの多くの人々が違う場所を遊ぶようになりました。新しい場所のひとつは中心部より離れた場所にあります。祝日のごとに、1時間あたり50組もの結婚式を終えたカップル達、つまり旧ソビエトの集団意識を共有する人々が、モスクワ大学の広場に押し寄せるのです。

時代の変化、社会ルールの変化、快過とは言えない状態、カオス(混沌)と不安が、永遠の幸福を渴望する背景として存在します。祝い事によるストレスは、フロイトのいう無意識のカーテンの奥を垣間見させます。

理不尽で謎に満ちた「ロシア氣質」は、哀われたアイデンティティーを求め、予測不可能な振る舞いを見せます。同時に、継続的に起きるカオスは、象徴的な規範の破壊をふたたび生

み出します。

つまり、この作品は、結婚式後の祝福された人々という筋書きを通して、カオスの王国にあって、人々は永遠に幸福を待ち続けているということを示しているのです。

《Happy End (Kumamoto)》について  
《Happy End (Kumamoto)》の映像素材は、日本に滞在在中、2日かけて撮影しました。日本の結婚式の慣習については全く知りませんでした。南嘉館長は私の《Happy End (Moscow)》を見たのち、展覧会「ATTITUDE2002」に招待してくださいましたが、彼からのスペシャルプランだったと思っています。

アジアへ来たのは初めてでした。日本や日本文化への知識は、まるで遠い惑星に対する知識くらいしか持ち合わせていませんでした。この発見はとても強烈な印象となりました。最初はうっとりして眺めているだけでしたが、あとから積極的に作品制作に取り組みました。うっとりしていたとき、そこには私の感情だけが、理知は存在しなかったのです。私はその気持ちを、ロシア語の「ザチャロヴァニ」という言葉で言い表せます。「うっとりするような」という意味で、ロシアの民話によく使用されます。

響きがとても魅力的でしかも、私にはまったく通じない言語(日本語)を話す人々と一緒に、私は撮影を行いました。それでも、私はこのプロジェクトの現場は興味深いものだったと思います。帰国後、どのように編集したらいいか考えました。私は、マスメディアの領域に、ヒントがあると思いました。

ロシアにとって「マンガ」という現象は、とてつもなく新しいものです。上手に翻訳されていても、この皮相的な内容に私が期待するものは何も無いのは明らかでした。ロシアの現実として、「マンガ」に似たものが全く存在しなかったということは日本の人々にとっておそらく信じがたいでしょう。欧米のコミックですら、ひろく親しまれているとは言えません。そんなわけで、私は神秘的で信じられないような旅を体験したわけなのです。私は、別の国の文化的背景に支えられている物事の意味を、全く理解できませんでした。文化的コードは多様で複雑で、戸惑いました。現実の時間は、儀式的なシーンによって何の予告もなく埋められていきました。「間」や「間合い」は、「虚」ではなく「満ち足りた状況」を示します。日本



《Happy End (Moscow)》2002, DVD  
(熊本市現代美術館蔵、アーティストより寄贈)  
背景にあるのがモスクワ大学



背景にあるのがマネージ広場



《Happy End (Kumamoto)》2002, DVD  
(熊本市現代美術館蔵、アーティストより寄贈)  
作品にサンプリングされるマンガのコマ(例)



作品にサンプリングされるマンガのコマ(例)

における「時間」のありかたは、ロシアとは違うものに見えました。

そういう訳で、日本の結婚式のビデオ撮影を行うなかで、なにか別のプロジェクトへと移行してしまっただけです。ロシア人のアイデンティティーについても考えるようになりました。

## Q.2 結婚式に興味をもたれて《Happy End》シリーズを制作されましたが、最近の興味は何でしょうか？近い将来作品として発表されますか？

私は最近、ロシアのマスメディア文化の領域に登場してきた「新しいヒーロー」に興味を持っています。この興味から、映像作品《ドラキュラ》(2005)を制作しました。悪者は世界を支配する権力を持たずに、少女達の神秘的な歌声に敗北するという内容です。

ヴァンパイアはロシアにおける現代文化の新しいキャラクターです。悪役は、近年の政治的、地球規模の衝突を通して、独特な雰囲気を持つようになってきました。

## Q3 観客にメッセージをおねがいします。

日本のマスメディアとアートの一側面として、マンガに非常に興味を持っています、そこから発想を得ることがあります。マンガには様々な文化的背景が入り込んでいるからです。時々、もし私が日本語を話せて日本文化に深く関わりを持つなら、ロシアの今日にみられる新しくて予期せぬ出来事を理解することができるのと思ったりします。自分の文化的空間のなかにいると、それを他者として眺めることは難しいことです。ですから、ロシアの今日における出来事、文字、特徴を、日本のみなさんが受け取る時何を思うのかにとっても興味を持っています。

単に日々の生活に現われることだけではなく、仮想的な想像や神話の解釈のことにも興味があります。たぶん、これは私の想像なのですが、日本のみなさんは、アニミズムの伝統の美徳によって、たぶんなにか幻想的な解釈をしながら、物事を見る特別な力を持っているのではないかと思います。

私と一緒にこの興味深いゲームを分かち合っていたいただければ幸いです。

## Q4 今年以降参加される展覧会を教えてください。また、どのような作品を出品しますか？

富山県立近代美術館で開催される展覧会「種の起源：ロシアの現代美術 私たちは生き残ることができるのか」(2006.8.19-9.24) (広島市現代美術館へ巡回) に出品します(キュレーション:ジョセフ・バックスタイン)。私は、最新プロジェクト《Hidden menace(隠された脅威)》を展覧します。

《Hidden menace》についてお話しすると、このプロジェクトはマスメディアの生産物としてのコミックを使用した2回目のプロジェクトとなります。コミックは、ロシアの伝統文化、「言葉」という大衆文化の領域を支配し始めたところからです。

私にとって、第1回目(《Happy End(Kumamoto)》:訳者注)は、典型的な行為を特定の「型」と関連づけることが面白かったのですが、この第2回目を通じて、国際的なコードと国際的な常套句という新しい辞書をマスターすることになるでしょう。

私にとって、コミックとは、刺激というものや、文化的背景に支えられた物事についての百科事典のように、今は思えるのです。現代のマスメディアは、人間の振る舞いを研究する実験所のように見えます。観客の直感をコントロールし、観客のリアクションを指揮者のようにコントロールします。ロシアのマスメディアは新しい視覚的なシンボルをうまく発展させていません。しかしうまくイデオロギーとして描かれたなら、原始的な文化のように本能で反応するレベルにおいては権力を持つでしょう。

この《Hidden menace》プロジェクトにおいて、私は、大衆の文化現象におけるコミックの領域と人工的なリアリティーについて表現したいと思います。今は、イタリアのコミックと日本のマンガを使って制作しているところです。そのなかに隠された集団的な幻想に興味があります。異なった意味合いと深い動機、私はそれを引き出し、強調し、変化させ、なにか新しい結合を生み出したいのです。

将来、私は、ロシア人のメンタリティーにおいて、なにか新しい神話的な領域を定義したいと思っています。いまだ存在しないロシアのコミックとして発表できたらと思います。(翻訳:H.T)



## 「養真流いけばな展」

2006.5.19-5.21 熊本市市民会館展示ロビー 熊本市桜町1-3 TEL355-5235

養真流のいけばな展が一昨年引き続き開催。「日常周辺の美を探究する」をモットーとするだけあって、私たちの暮らしの中にあるおおいを与えてくれるような、心を込めて活けられた花々が並んでいた。「自然の花を自然にあつたとき以上に美しく見せるのはとても難しいです」と先生方はおっしゃっていたが、野あざみや木いちごなど花屋ではなかなか見られない花材が使われていたり、急須や湯のみを花器がわりに活かされていて、生活に密着したいけばなとしての自由な創作態度がうかがえた。入口に初代家元の言葉が飾られていたが、その額の前にもさりげなく花があしらわれていて、その細やかな心配りは日々自然の花々と真剣に対峙している姿勢から培われたものなのだろうと感じられた。(E.Z)



# ART de Gyan!

[アート・ド・ギャン]  
熊本県でアート・どう?の展です。

[MAY-JULY] 2006

## 「第6回 川口かおるパッチワーク教室キルト作品展」

2006.6.28-7.3 アートスペース大宝堂  
熊本市上通5-6 TEL354-2155

教室の生徒30名の作品が展示されていた。同系色でまとめた幾何学模様、艶やかな和布を用いた扇のパターン、花や家のパターンでかわいらしく作られたものなど、生徒それぞれの感性が存分に発揮されたキルトが、鮮やかに目に飛び込んできた。大きな作品では、ピースというパターンを構成する三角形や四角形の小さい布が1000枚以上使われており、手縫いでキルティングをするため制作は1年ほどかかるそう。「布自体にも魅力があって、見たり触ったりするだけでも楽しい。制作は大変ですが完成した時の喜びと達成感は一とおお。好きなことだから続けられるんです」と講師の川口さん。キャプションには作品に込めた想いなどを綴っており、生徒の皆さんの頑張りと温かさが伝わってくる展覧会だった。(A.T)



## 「[層]layered/gaju・ウエノトモ二人展」

2006.6.17-6.25 orange  
熊本市新市街6-22 TEL355-1276

gajuさん(クレイ造形)とウエノトモさん(写真)の2人による展覧会。興味深かったのは、女性モデルの全身が、ところどころ、gajuさんによってクレイで固められ、ウエノトモさんが写真作品を制作し、人間に变身しようとする心を見せている人形という写真による物語が出来上がっていたこと。「層」という展覧会名のとおり、gajuさんはこれまで展開していた童話的なほのぼのとした世界とは異なったもうひとつの世界を展開、ひとの皮膚を想像させるパネルや額を制作。ウエノトモさんは、粘土と下地の布という「層」をまとった女性の皮膚の美しさ、身体の内面を映し出していた。大量にばらまかれた写真と等身大の人形によるインスタレーションは、人間に变身しようとした人形の物語の美しい結末を暗示したような、せつない美しさがあった。(H.T)



## 「第25回熊日新人書道展」

2006.6.20-6.25 熊本県立美術館本館

熊本市二の丸2 TEL352-2111

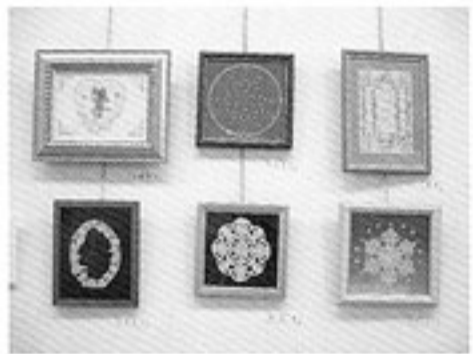
熊日新人書道展は、熊日創立40周年を記念して創られたもので、若手の発掘や県書道界の充実・拡大を目的に毎年開いている。今年は281点の応募があった。審査員は、川俣深石、兼城昌山、井上亨子、江口幹城、田内研水、平方研水、江上蒼龍の7人で、特選15人、準特選72人、秀作115人が選出され、県立美術館本館に展示された。作品は漢字、かな、近代詩文書、小字数書、篆刻の6部門である。漢詩や短歌、現代詩を書いたものや、古典の臨書など、書体も書風も多彩であった。今回は特に高校生の作品が新鮮で、よく練りあげられており、佳作が多く見られた。かな作品の応募が例年にくらべて少なかったのが目についた。(写真提供:熊本日日新聞社)(S.K)



## 「パーチメント・クラフト作品展 ~ペーパーレースの世界~」

2006.7.4-7.9 熊本県立美術館分館  
熊本市千葉城町2-18 TEL351-8411

熊本でも初めての展覧会となるパーチメント・クラフト。通常、A4のトレーシング・ペーパーにデザイン、型つけ、切り抜きをして、レースのような繊細な表情をみせるパーチメントは、日本に紹介されて、およそ10年になるという。現在、熊本の8箇所で開催するエンジェルズ・ウィングの代表上田紀代子さんは、グリーティングカードを作成することが一番多く、一枚の紙に、隆起を施し、背景に色をつけるなど、それぞれのアイデアを生かしながら制作を楽しむことができるとお話を聞いた。(Y.H)



## 「第28回 熊本県書道展」

2006.6.13-6.18 熊本県立美術館本館第1-3室、分館第3室  
熊本市二の丸2 TEL352-2111

熊本書芸振興会(会長未定、森山淡草理事長)が主宰する書道展で、公券部から、会友、無鑑査、準会員、会員の五段階制をとって作品レベルの充実向上を図ろうとしているのが特徴である。そのうち審査員を含む会員と準会員の約90点を「熊本県書道展役員展」と銘打って千葉城の分館四階に、そして無鑑査、会友、公募合わせて約220点を二の丸の本館一階に展示した。県内の、独自の表現様式を確立した中心的指導者がほとんど会員として活動をしているので、漢字・かな共にそれぞれ表現様式にも内容にも変化が見られて、一中展の発表会よりもはるかにおもしろい。また、昇格をするのに大変な時間と労力を費やす訳だから、資格の段階ごとにその年次の差が見られて楽しいし大いに勉強になる。なお、中央の権威ある展覧会に出品したり、そういう環境で勉強を続けている人の作品はやはり精彩が違ふと、いつも敬服する。(T.M)

## 熊本市民美術展 「コラボレーターの会」第8回小品展

2005.5.17-5.26 三点鐘  
熊本市手取本町3-8有明ビル TEL326-3040

「コラボレーターの会」は、当館で毎年開催している熊本市民美術展熊本アートバレード(本年度は11月11日(土)~26日(日)「優しさ」をテーマに開催予定。)をともに支えて下さっているボランティアさんの会である。現在は、会員15名で活動されている。今回は小品展ということで、皆さんがこれまでに制作されてきた作品を展示。分野も油絵、日本画、水彩画、版画、水墨画、写真、手描き友禅、ステンドグラスととても幅広い。会場となった三点鐘には会員の皆さんが集い、そこを訪れた人との出会いや知人との再会があり、テーブルを囲み、思い思いに語りあう姿が見られた。地元を大切に活動されてきた会の皆さんとそして熊本美術界を応援してこられた画廊喫茶ならではの光景であったと思う。(N.I)



## 「日常の美」

2006.7.1-7.9 藤崎八幡宮能楽堂  
熊本市井川淵町3-1 TEL343-1543

藤崎八幡宮能楽堂での島津真由美(花人)×馬場秀彦・淑子(古美術)の展示。藤崎八幡宮能楽堂の、長い年月をかけて磨かれた板目の光る舞台上、所狭しと並べられた世界各地の古美術と布類、活けられた季節の花々、青々とした苔。そのひとつひとつから愛情を込められたモノ特有の温かみを感じられた。「能楽堂も、花も、古美術も、良いものなのに日常的には立ち入らない、活けない、触れない。もったいないなあと思って全部合わせてみたくて。気持ちいいものが出て来ないはずがないから。」と、Gallery KÖENのオーナーで、企画者の樹村旅人さん。この「日常の美」と名づけられた心地よさのために作られた空間には、入れ替わり立ち代り老若男女いろいろな人が訪れ、蚊取り線香の匂いと梅雨の晴れ間の風に吹かれながら、ゆつくりと時を過ごしていた。(S.Y)



## Visitor's Letter

来館者のみなさんからのメッセージ アンケートに寄せられた感想(抜粋)を紹介いたします。

- ◇アン・ハミルトン展アンケートより  
・「見えるのに見えない世界」にとても魅了されました。アン・ハミルトンさんのほかの作品も是非展示して欲しいです。(22歳・男性・福岡県)
- ・各家々のそれぞれの営みを、鳥になって空から見ているような感じがしました。鳥の声は、いつも聞くともなく聞きながら、私も生きてきたのだなと思いました。(53歳・女性・東京都)
- ・不思議としか言えない感じがします。テーブルに上がって目を閉じると、鳥の鳴き声が頭の中をめぐって、姿はないけれど、まぶたの奥にぼんやりと鳥の姿が浮かんでくる感じがした。(36歳・女性・宮崎県)
- ・ちょうど子どものツアー中で、周囲にしながら楽しめました。会場に人の気配がなくなると、物静かな監視員の方々の存在が強い感じて、たいへん刺激的な会場でした。(31歳・女性・山口県)
- ・不思議な気分になった。自分が人間じゃなくなったかのような気分になった。(20歳・女性・鹿児島県)

- ・私が生きてきた21年間のいろいろな出来事、特に父と母の若い頃の印象が頭によみがえってきました。なくしたくない記憶だなと思いました。(21歳・女性・熊本市内)
- ・期待以上でした。光に蝉の声、暗闇のなかで、1945年の広島原爆で亡くなった父の事を再び思い出して、悲しく、また、心いやされました。(60歳・女性・福岡県)
- ・不思議な体感を得ました。生と死とか、静と動、一人一人感じ方が異なるでしょうね。(58歳・女性・熊本市内)
- ・自分のことを、自分から1歩離れたところに連れて行って見せてくれるアンの作風は本当にすばらしいと思う。(38歳・男性・東京都)

## 海老原喜之助の壁画《蝶》、熊本学園大で復活!

新市街アーケードのうえで静かに時を待っていた、熊本東宝会館の海老原喜之助の壁画《蝶》が、熊本学園大学に移設されることになりました。1960年、海老原が熊本を去る年に、熊本への置き土産として制作されたタイルモザイクによる壁画《蝶》(13.6x10.1m)。そのタイルひとつひとつも、愛知県豊田に特注され、海老原の厳しい審美眼を経過したもの。1975年に設置されたアーケードのうえに隠れて以来、知る人ぞ知る存在だった壁画《蝶》が、来年3月31日、熊本学園大学の60周年記念会館(仮称)の外壁に復活します。現在着々と工事が進められ、今ある場所からの撤去作業は、深夜12時から朝の6時の間に行われています。壁画を1m四方のパネルに切り出して、徐々に撤去するという手順ですが、そのパネル1枚は2~3トンの重さがあるそうです。熊本学園大学の目黒純一常務理事は、「学園大の前身のひとつ、熊本短期大学の教養科の美術コースは、海老原喜之助の弟子としてエビ研を支えた乙葉統先生に教鞭を取っていただいております。また、美術家連盟会長の香口先生も、学園大でご指導されました。世代会の芹川先生、坂田操先生など様々な方にご尽力をいただきまして、海老原喜之助との様々な縁が不思議と繋がって、移設という運びに到った気がします。今回の移設で、郷土を深く愛している方々から多くの暖かいご声援をいただきました。その反響に驚いております。」と、力強く語っておられました。(H.T)

\* 9月17日、14時より当館ホームギャラリーにおいて、当館館長南高宏による、海老原喜之助の壁画《蝶》をテーマにしたお話をいたします。入場無料。



1960年当時の壁画《蝶》



ooh-vanguard!

# 大番外

当館学芸員が心動かされた芸術・文化の動向について語りあうコーナー、「大番外」。

第2回 『天才アラキー』を語る(坂本顕子×矢加部咲)

S:本年度のアートバレードでは、審査員に写真家のアラキーこと荒木経惟さんをお迎えします。それにあたって、予習の意味もこめて、天才アラキー、そして最新刊の『幸福写真』について語ってみたいと思います。まず、アラキーの写真といえば、何を思い浮かべる？

Y: やっぱり…「ワイセツ写真」(と、ご本人が言っています。笑)ですよ。あそこまで直接的に性を描写しているのに、アートとして受け入れられている写真ってなかなか無い気がします。女性にファンが多いことも、受け入れられている証換なんではないですか。

S:私も初めて見た時はびっくりしたけれど、今はわりと冷静に、楽しく見ることが出来ます。年のせいかもしれませんが(笑)。それに、10年前、20年前と写真を取り巻く状況も変わってきているしね。ネット上にはそれこそ、ポルノグラフィックな画像があふれている。ただ、アラキーの写真は、目の欲望に従うという点では、そういう画像と根っこが一緒だけれど、最終的なところに人間に対する愛があるところが、一番違うんじゃないかなと思います。

Y:アラキーは、「どんな女でもその女の魅力を引き出して写真にしているから天才なのよ」と言ってるし、確かに彼が撮るとどんな女性も顔の造作に関係なくエロティックで魅力のある艶女(アデージョ)になりますよね。だけど、愛する妻ヨーコさんを撮った写真は、ちょっと違います。もっと高尚なものを見ているような、彼女に対する尊敬の念をすごく感じますよね。

S:確かに、『センチメンタルな旅・冬の旅』(新潮社、1991年)とか、『わが愛、陽子』(朝日ソノラマ、1978年)をみると、夫にこんな写真を撮ってもらいたいと思う…(ため息)。センセーショナルなヌード写真の一方に、ヨーコさんを撮った写真がある。この二面性が、女性ファンを惹きつけるのでしょうか。モデル志望者もものすごく多いそうですし。

Y:そうですね。でも、アラキーは「ヨーコのエロスがアタシを写真家にした」と書いているくらいですから、ヨーコさんにも多大なるエロスを感じていたんですよ。だとしたら、やっぱりアラキーにとって愛するヨーコさんのエロスは特別尊いものだったのかなあ、なんて。そういう部分に「写真、即、俺」というアラキーの「私写真」を感じますよね。

S:うん。アラキーの徹底的に極められた「私写真」の中には、普遍的

な愛の世界が映し出されている気がします。さて、アラキーの写真の中では、どんな作品が印象に残っていますか？

Y:実は私が一番好きなのは、少女写真ですね。同じく子供を撮っている『さっちゃん』(新潮社、1994年)の元気さとはぜんぜん違って、少女特有の雰囲気がよく出てる。小学生くらいの女の子って、結構怖いじゃないですか。なんか邪気がなくて怖い。本能的っていうんですかね、その感じが印象的です。水着で花をもてあそんでいる女の子とか、道端に絵を描いている子の写真が好きなんですけど(『ARAKI by ARAKI』講談社、2003年)。邪気も媚(こび)もないその頃の少女にしかできない顔が写ってる気がする。坂本さんのベストショットはなんですか？

S:私が印象に残っているのは、『食事』(マガジンハウス、1993年)。ヨーコさんが病院から一時帰宅されている時の食事を、接写してエロティックに撮ったものです。何気ない明太子や納豆が天才の手にかかると、こう撮れるのかと。あと献立が気になって。すごくバランスがよくて美味しそうなんです。けれどそんな幸福な食卓の情景が、最終的にヨーコさんの最期へと向かっていくのも印象的でした。恥ずかしながら、学生の時にしばらく影響されて、食事の写真を撮っていましたね。

Y:こうやって考えていくと、アラキーは本当にいろんな写真を撮っていますね。最新刊の『幸福写真』は、位置づけ的には、『男の顔面』(1999年、文芸春秋)や『日本人ノ顔』(2002年、紀伊國屋書店)に近いのかな。

S:この『幸福写真』は、いわゆるアラキー的なエロスをまったく感じさせない。今までは1枚みても「アラキー」ってわかる、モチーフの選び方や写し方だったけれど、今回は裸も一切無しだし、お爺ちゃんお婆ちゃんにも堂々と見せられる(笑)。それに、これまでの写真は、個人の裏側とか過去を想像させるようなものが多かった。どんな幸せそうな写真の中にも、小さな「死」が粒子のように漂っているんだよね。でも『幸福写真』は、そういった「死」の影はまるっきり見えない。すごく肯定的というかストレートに撮ってある。

Y:うん。「死」の影もそうだし、「生」のしんどさも見えないですよ。今までの幸福の中の不幸とか、怖さの中の暖かさなんかを表現していたのとは正反対。純粋に微笑ましい場面をモチーフに選んであるし。アラキーも書いていたけど、今じゃこういう写真って作品として誰も撮らないし、コンテストに出しても評価されないっていう現実があるんですけど。そんな中で今、天才アラキーが「純粋に『幸福写真』を撮るっていうことがおもしろい。

S:やっぱり、こういう写真を時代が求めているのかなあ。今、仮に「不幸写真」というのがあっても、見る側が受け取る余裕がなくなっちゃったのかもしれない。身の回りやメディアにもあふれているもんね。「幸福」の価値自体すごく揺らいでいるし。

Y:そうですね…。なんか一言で「幸福」とか「不幸」とか言えない時代になっちゃいましたよね。幸福って何なんですかねえ。うーん。お金

とか名誉とか恋愛とかいろいろありますけど。でもなんだかんだ言っても、人間関係の上で「幸せもんだなあ」って思える方が幸福な気がしますよね。やっぱり人じゃ生きていけないですもん。

S:そうだね。この「幸福写真」も、写真を撮る瞬間かもしれないけれど、アラキーが市井の人々と、人間同士の関係を切り結ぶことを楽しんでいる様子が伝わってくる。アラキーの魅力って、マッチョな強さとすごく繊細な優しさが同居しているところにあると思うけど、この「幸福写真」って、アラキーの持っている本来の優しさのようなものが、正直に出されているね。

Y:「優しさ」といえば、実は見事に本年度のアートバレードのテーマでもあるわけですが…(笑)。熊本の皆さんが考える「優しさ」を、アラキーがどう審査されるか楽しみです。

S:たくさん作品のご応募、心よりお待ちしております！と、ここで宣伝させていただいて、終わりといたしましょう。



書籍データ:荒木経惟『幸福写真』ポプラ社、2006年  
●定価1470円(税込み)

**応募要項**

第10回熊本市民芸術祭  
熊本アートバレード  
審査員:荒木 経惟氏

※応募期間:7月18日(水)10時～7月29日(土)18時  
※受付時間:7月18日(水)11時～11月14日(土)18時  
※応募先:熊本現代美術館学芸員課

アートバレード応募要項配布中です  
今回の審査員はアラキーこと荒木経惟(あらかぎのぶよし)さん。テーマは「優しさ」です。作品受付日時は10月28日・29日です。美術館で配布中の応募要項に詳細が記載されています。皆様ふるってご応募ください。

お知らせ

井手記念室展示替しました

このたびの展示は、夏の祭と、若き日の人物描写に焦点をあてております。井手宣通がライフワークとした日本各地の祭の活気を映した作品とあわせて、青年時代に異文化にふれたときの感動をとどめたデッサンをご紹介します。

アン・ハミルトン展覧会カタログ出来ました

アン・ハミルトン[voce]展の会場風景の様子や、アン・ハミルトン&デヴィッド・エリオットの対談「記憶の声、魂のささやき」、当館館長南高宏と主任学芸員本田代志子の論考を掲載。(定価2000円、通信販売可(送料別、現金書留での前払))

「生人形と松本喜三郎」展カタログ再版

2004年の展覧会のご好評のカタログが再び入手可能となりました。2000円、通信販売可(送料1冊340円)

グループ・ツアーのお知らせ

10名以上のグループで観賞の場合、学芸員による企画展の解説案内をいたします。展覧会チケットが必要です。お早めに電話で日時をご相談のうえ、お申し込みください。ご予約電話番号:096-278-7503・7504

アートキッスレターの主な設置場所の紹介  
熊本市内ギャラリー、熊本県立美術館(本館・分館)、熊本県立伝統工芸館、市役所市政情報プラザ、市民病院、南部市民センター、幸田市民センター、西部市民センター、秋津市民センター、龍田市民センター、託麻市民センター、東部市民センター、清水市民センター、大江市民センター、花園市民センター、北部総合支所、鉾田総合支所、河内総合支所、天明総合支所、五福地域開発センター、総合女性センター、青少年センター、産業文化会館、中央公民館、健康文化ホール、国際交流会館、市民会館、熊本博物館、こども文化会館、熊本市立図書館

郵送のご案内(有料)  
毎号確実に入手されたい方、遠方に御住まいの方に、ご希望に応じて直接送付いたします。郵送料は各号1部につき90円(年間購読を希望される場合は540円)、切手にてご送付ください。各号とも発行直後にお送りいたします。複数部数の送付を希望される場合は、お問い合わせ下さい。

当館の企画展ポスターを貼ってくださる場所、チラシを置いてくださる場所を募集しています。お問い合わせ先:096-278-7500

**編集後記**  
いよいよ夏休みですね。去年の夏休みも、小・中・高校生の学生の皆さんが美術館で楽しく卓球をしたり、企画展を興味深く鑑賞したり、マンガや本を熟読したり、さまざまな過ごし方をされていました。せつかくの夏休みですから、ちょっと夜もお出かけというときの、美術館の夜楽しめるイベントを紹介します。まず、ホームギャラリー。毎晩19時より、ピアノ・ボランティアさんによるピアノの演奏があります。そのあとは、ジェイムズ・タレルの作品《ミルク・ラン・スカイ》。毎晩19時30分より15分間、光の色が移り変わる様子を体験できます。

神秘的ですよ！  
また、今年も、8月12、13日は夜間開館日。映画の特別上映が開催されます。19時からホームギャラリーで、映画「A.I.」(12日)と「天と地」(13日)を上映(入場無料)。あわせて、毎週月曜日に開催しております「月曜ロードショー」。14時と18時からアートロフトで上映しております(入場無料)。なんと、上記のイベントはすべて無料です。ぜひ夏の夜のデートにご活用ください。  
編集長 富澤治子

●執筆の一覧  
\*ギャラリー取材原稿の文末にイニシャルにて記載しております。  
兼城昌山  
Syozan Kaneshiro (書道家)  
森山淡草  
Tanso Moriyama (書道家)  
本田代志子  
Yoshiko Honda (熊本市現代美術館主任学芸員)  
麗座江美  
Emi Zoza (熊本市現代美術館学芸員)

富澤治子  
Haruko Tomisawa (熊本市現代美術館学芸員)  
坂本顕子  
Akiko Sakamoto (熊本市現代美術館学芸員)  
竹田 茜  
Akane Takeda (熊本市現代美術館学芸アシスタント)  
伊豆菜々  
Nana Izu (熊本市現代美術館学芸アシスタント)  
矢加部 咲  
Saki Yakabe (熊本市現代美術館学芸アシスタント)

●発行元/ART KISS LETTER アート・キッス・レター Vol.28  
2006年8月発行(夏号) ◎無料◎  
●編集人/南高 宏 編集長/富澤 治子 ●印刷/コロニー印刷  
●デザイン/(有)松永 社デザイン事務所  
●発行/熊本市現代美術館 〒860-0845 熊本市上通2-3  
TEL.096-278-7500 FAX.096-359-7892